

今年亡くなった名演奏家、アニヴァーサリーの名演奏家を聴く

プログラム

今日は今年を振り返って、これまでご紹介出来なかったアニヴァーサリー演奏家、今年亡くなった名演奏家を2回に渡ってまとめてご紹介することにしました。

今年は生誕100年を迎えた名ソプラノ歌手が二人います。リーザ・デラ・カーザとイルムガルト・ゼーフリートですが、今回はゼーフリートをご紹介します。

今年も多くの名演奏家がこの世を去りましたが、今回はイェルク・テムス、ジェシー・ノーマン、佐藤しのぶ、アーロン・ローザンド、アンドレ・フレヴィンの5人を取り上げ、この名演奏家たちを偲びたいと思います。（演奏家の紹介は別紙に続く）

クスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第4番ト長調 ~ 第4楽章

イルムガルト・ゼーフリート (ソプラノ)

ジョン・バルビローリ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1964.1.8 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ロベルト・シューマン (1810~1956):

幻想小曲集op.12 ~ 第1曲「夕べに」/第5曲「夜に」

アラバスクハ長調op.18

イェルク・テムス (ピアノ)

(1992.5.26 カサルスホールでのLive)

リヒャルト・ワーグナー (1813~1883):

歌曲集“ヴェーゼンドンクの5つの詩”~第1曲「天使」/第5曲「夢」

ジェシー・ノーマン (ソプラノ)/ジェフリー・パーソンズ (ピアノ)

(1983.8.14 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

ジョルジュ・ビゼー (1818~1893):

歌劇“カルメン”~第1幕から“ハバネラ(恋は野の鳥)”

ジェシー・ノーマン (ソプラノ)/小澤征爾指揮ボストン交響楽団/タングルウッド祝祭合唱団

(1989.8.19 タングルウッド音楽祭コンサートホールでのLive)

ジュゼッペ・ヴェルディ (1813~1893):

歌劇“運命の力”~第4幕から“神よ、平和を与えたまえ”

佐藤しのぶ (ソプラノ)/大野和士指揮東京フィルハーモニー交響楽団

(1995.1.3 NHKホールでのLive)

*** 休憩 ***

エルネスト・ショーソン (1855~1899):

詩曲op.25

アーロン・ローザンド (ヴァイオリン)/ヒュー・サング (ピアノ)

(2004.5.13 王子ホールでのLive)

ラルフ・ヴォーン=ウィリアムズ (1872~1958):

クリーンスリーヴスによる幻想曲

アンドレ・フレヴィン指揮ロンドン交響楽団

(1971.4.27 大阪フェスティバルホールでのLive)

セルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943):

交響曲第2番ホ短調op.27~第3楽章、第4楽章

アンドレ・フレヴィン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(2002.5.27 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

イルムガルト・ゼーフリート(1919~1988)は南ドイツのケーニヒスリート生まれ。アウグスブルク音楽院で学び、1939年当時カラヤンが音楽監督を務めていたアーヘンで「アイダ」の巫女役でデビュー。43年からはウィーン国立歌劇場に所属し、エリーザベト・シュワルツコップ、ヒルデ・ギューデンと並んで「ウィーンの三名花」と謳われました。モーツァルトやR・シュトラウスの作品を得意とし、R・シュトラウス生誕80年記念公演では、作曲者自身の推薦で、「ナクスス島のアリアドネ」の作曲家役を歌っています。1947年コヴェント・ガーデン王立歌劇場、1953年メトロポリタン歌劇場にデビュー。その後もザルツブルク、ミラノ・スカラ座等を中心に世界的に活躍しました。一方で、ドイツ・リートにも優れ、両方面で活躍したシュワルツコップと並ぶこの時代の代表的な名ソプラノです。

イエルク・デムス(1928.12.2~2019.4.16)はオーストリアのザンクト・ペルテン生まれ。ウィーン音楽アカデミーでエドウィン・フィッシャーに師事した後、さらにイーヴ・ナット、ギーゼキング、ケンプ、ミケランジェリにも師事。1953年にウィーンでデビューして成功を収めると、56年のイタリア、ブゾーニ国際コンクールで優勝、フリードリヒ・グルダ、パウル・バドゥラ=スコダと共に“ウィーン三羽鳥”と呼ばれるようになり、世界的名声を確立しました。親日家として知られ、わが国にもたびたび訪れています。真摯に向き合うピアノスタイルが常に共感を呼ぶ名ピアニストでした。

ジェシー・ノーマン(1945.9.15~2019.9.30)はアメリカ、ジョージア州オーガスタ生まれ。4歳の時から教会で歌い、奨学金を得て、ハーワード大学でキャロライン・グラント、ミシガン大学でピエール・ベルナックに師事。1969年ミュンヘン国際音楽コンクール声楽部門に優勝。同年、ベルリン・ドイツ・オペラで「タンホイザー」のエリーザベト役が絶賛され、歴史的デビューを飾ります。72年にミラノ・スカラ座とコヴェント・ガーデン王立歌劇場に「アイダ」でデビュー。83年にはメトロポリタン歌劇場にもデビューします。その後は幅広いレパートリーで世界最高のソプラノのひとりとして活躍しました。圧倒的な声量と、幅広く深みのある表現力は、いつまでも我々の心に刻み続けます。

佐藤しのぶ(1958.8.23~2019.9.29)は東京都生まれ。その後大阪府高槻市に移り、大阪音楽大学付属音楽高等学校、国立音楽大学声楽専攻を卒業後、声楽を島田和子、中山悌一、田原祥一郎に師事。文化庁芸術家在外研究員としてイタリア、ミラノへ留学し、1984年二期会の「椿姫」、「メリー・ウィドー」でデビュー。1987年、オペラ歌手として初めてNHK紅白歌合戦に出演。ウィーン国立歌劇場での「蝶々夫人」をはじめ、ケルン市立歌劇場やベルリン・ドイツ・オペラ等、主要な劇場で主役を務めました。1999年には、プラハで世界首脳が列席した「ピロード革命10周年記念演奏会」でアシュケナーズ指揮チェコ・フィルと共演、その模様は世界に中継されました。毎年5月「母の日に贈るコンサート」を開くなど国内での音楽の普及にも努め、天性の華やかさと美声で、声楽界を盛り上げてきた名ソプラノです。

アーロン・ローザンド(1927.3.15~2019.7.9)はアメリカのインディアナ州ハモンドに生まれ、ロシア系の父、ポーランド系の母のもとで、3歳でヴァイオリンを手にし、9歳の時にシカゴ・オペラハウスでリサイタル・デビュー。10歳でシカゴ響とメンデルスゾーンでコンチェルト・デビューを果たします。イザイ門下のサメティーニに師事、カーティス音楽院ではアウアーの弟子ジンバリストに学び、1955年にヨーロッパ・デビュー、世界的なヴァイオリニストとしての名声を確立しました。イザイ等に代表されるフランコ=ベルギー派(フランスやベルギーで発展したヴァイオリン奏法の流派)、オISTRAフ等のロシア派両奏法の伝統を継承し、19世紀の香りを残した独特のロマンティシズムを持った名手です。

アンドレ・プレヴィン(1929.4.6~2019.2.28)はユダヤ系ドイツ人の父を持ちベルリンで生まれました。幼少からベルリン高等音楽院でピアノを学び、ナチスから逃れるためフランスに渡り、9歳でパリ音楽院に入学、マルセル・デュプレに指導を受けました。1938年に家族とアメリカに渡り43年にはアメリカ国籍を取得。やがてMGM映画の音楽監督に抜擢され、映画音楽の作曲家として人気を博し、同時にジャズ・ピアニストとしても知られるようになりました。この頃ピエール・モントゥーに師事、1962年にセントルイス交響楽団を指揮してクラシック指揮者としてデビュー、大成功を収め、本格的に指揮者の道へ進みます。1967年~1969年ヒューストン交響楽団の音楽監督、1968年~1979年ロンドン交響楽団の首席指揮者、1976年~1984年ピッツバーグ交響楽団の音楽監督、1985年~1992年ロイヤル・フィルの音楽監督、1986年~1989年ロスアンジェルス・フィルの音楽監督を歴任。他にもウィーン・フィルと親密な関係を持ち、NHK交響楽団の首席客演指揮者にも就任しています。幅広いレパートリーを持ち、ピアニスト、作曲家でもあったプレヴィンは、強烈な印象を残す音楽家ではありませんでしたが、彼の作り出すしなやかで流麗な音楽は、ほっとするような暖かみに溢れていました。今回ご紹介するラフマニノフの演奏は、第3楽章が終わった楽章間で、めがねを外して涙を拭う場面があり、プレヴィンの人間くさい一面をみることができました。